

大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可  
昭和三年十二月廿八日印刷納本

# 山とスキー

第八十九號



昭和四年一月一日發行（每月一圓）  
（一日發行）

札幌 山とスキーの會 發行

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號九十八第

.....

記事

秩父宮殿下ヒユツテの竣工に當つて

小川玄一謹記 (一)

登山家の横顔

伊藤秀五郎 (八)

スキーワツタスの製作に關して

齋藤省三 (五)

憶出深かりしヒユツテン・レーベン(五)

廣田戸七郎 (三)

—ホルメンコーレンデー—

登山とスボーツ

伊藤秀五郎 (三)

編輯後記・其他

寫眞版

ジグモンド・ルードとホルメンコールバツケン

ノールウエー一流選手の飛躍振り

赤城山の第五シャントエ

昭和四年一月發行



Sigmund rund



Holmenkolbakken





向つて右 上段 Alf Andersen 中段 Snersrud Jon. 下段 Ole Stenen  
 向つて左 同 Grottnumsbraaten 同 Kr. Johansson 同 Ole Kclterud



## 秩父宮殿下ヒユツテの竣工に當つて

小 川 玄 一 謹 記

北大スキー部の古い記録を繙くと、大正八九年頃のページに「手稻山中雁皮平に於てビルグリー式雪中露營をなし、山頂を極む。寒氣激しく一睡をもちし得ず。」「奥手稻大島組造材小屋を借り受けて手入をなし、北大スキー部登山小屋となす。」「奥手稻登山小屋廢退し使用に堪へず。」こんな記事につゞいてその後も部員の間にヒユツテ熱がたかまり、一晚泊りの小屋を組んだり、一シーズン限りのものを造つたりした記事がザラに出て来る。

これらの記事を見る度に、そして又外國の寫眞や雜誌などでアルペン邊りのヒユツテンレーベンの記事を見る度に、僕はどんなにかヒユツテと云ふものに憧れを持つたか。或は又大正十二年の冬 *Das Wunder des Schnee Schims* によりアルペンのピークに立てられた丸太造りのスキーヒユツテに於て、ゆつたりと煙草を燻らしながら暖い紅茶をすゝつてゐる様をまぎろ見せつけられる度に、僕はどんなにか興奮したか。そして又大正十五年の夏から冬にかけて万難を排し苦心慘憺して、あの雁皮に取り圍まれた清流のほとりに嘗つて夢想した純スキツル式の手稻バラダイスヒユツテを造りあげた時僕はどんなにか狂喜したか。

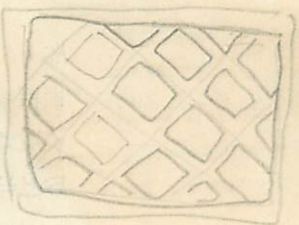
どれもこれも僕達にはまださして古い記憶ではない。ところかどうだらう、其僕達が今手稻から朝里・余市・無意根知喜茂別・中山峠・狹薄・空沼・漁・惠庭を経て支笏湖に通ずる定山溪を中心としたスキーヒユツテのケツテンの見完成を

ようとしてゐるのである。實に夢の様な氣がする。しかも其ケツテンの中に秩父宮殿下の御建設遊ばさるゝヒユツテを空沼岳中腹のタンネに囲まれた万計沼のほとりに見ようとは………………。僕達のみがいたづらに感激し狂喜してゐる場合ではない。僕達は一刻も早く雪中露營の寒氣に身を震はせ、中山峠の小屋で煙に咽び、或は又奥手稻の造材小屋の廢退に落膽したスキー部の先輩は申すに及ばず、山やスキーに志す僕達の仲間にこのヒユツテの落成する迄に至る經過を話し喜びを共にしなければなるまい。

長くも秩父宮殿下のヒユツテ建設の御計畫は殿下御來道の折、過ぐる二月二十四日のあの夜手稻バラダイスヒユツテ御假泊に際し、スキー仲間とお話中大野スキー部長のスキーヒユツテのケツテンの説明にいと御満足遊ばされ、殿下御自身も其ケツテ中いづれかにヒユツテ建設の御希望をお述べ遊ばされたものである。そして候補地選定の御下命と共に、しかとした記憶はないがチセスタブリ登山の際、吹雪の爲馬場温泉に休憩あらせられた時だと思ふ。空沼岳附近はどうだらうと言ふ様なお言葉があつたのだ。この事を後になつて山崎先生のお宅で僕達本隊に入つてゐた連中が二三名で話しあつた時山崎先生は殿下の御慧眼にすつかり驚嘆された。と云ふのは大野部長、山崎先生はこのケツテ完成には遠からず志され、お二人とも手稻バラダイスヒユツテ、ヘルベチアヒユツテの出来上つた後つぎに建設すべき場所は空沼岳附近と密かに計畫を廻らされて居たのである。そして山崎先生の如きは先生の昵近者と計り、この附近はしばしば踏査されて居られたのである。然るに殿下が御來道、ケツテ計畫を聞きめさるゝや、一週間たらずのスキーツールにもかゝはらず空沼岳附近に御着眼されたからである。

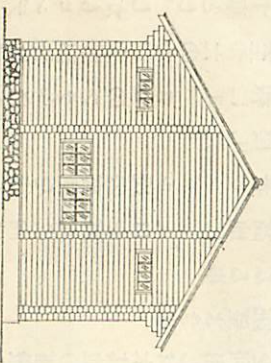
秩父宮殿下御建設のヒユツテ候補地選定並に之がプラン作製の御下命を受けた大野部長は、四月以來山崎先生と共に空沼岳附近實地檢分をなすと同時に、一方北大スキー部員並にスキー部先輩の意見を調べられたが、北大スキー部員並にスキー部先輩の意見も大体第一候補地は空沼岳附近、第二候補地は中山峠附近に一致した。そこで秩父宮殿下に言上すべき候補地は大体空沼岳万計沼のほとりと定め、プラン作製はさきに手稻バラダイスヒユツテ並にヘルベチアヒユツテの設計



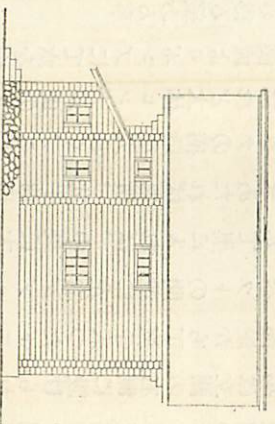


SKIZZE AM KOPFENDE FÜR  
S. ICH. PRINZEN CHICHIBU.

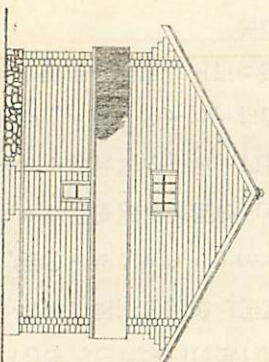
SÜDSEITE



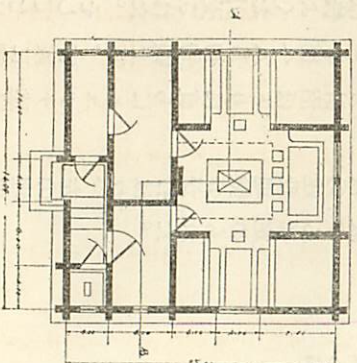
WESTSEITE



NORDSEITE



GRUNDRISS DES ERDEBODENS.



者マックスヒンデル氏を煩はす事とし、しかもヒンデル氏は快よくお引受された。そして七月末にはブランの作製終り大野部長の手元まで到着するに至つたので、大野部長はブランを携へ八月初旬頃上京、宮家に御報告を申上げられた。ところが八月廿五日に宮家より電報にて、さきのプランにより万計沼ほとりに直ちにヒユツテ建設をなすべく、そして工事一切は北大にて司る様御下命に接した。

そこで越えて九月十日設計者ヒンデル氏の來札を待ち最後の建設地檢分が行はれ、左の理由の元に建設地は万計沼のほとりにて、万計川落口の左側高地に、入口を東北に向け建設する權定められた。

一、この附近にて地盤最良なる事

一、湖水面並に東北に向ひ眺望よき事

一、万計沼溪流並に万計沼を利用し材木其他の運搬に便なる事

一、二階より空沼山頂を眺め得る望ある事

一、場合によりては万計沼溪流よりポンプにて水を引き得る事

設計圖には多少の變更はありたれど大体ヒンデル氏のプラン通りにて、四間の四間一尺の二階建丸太小屋であつて、階下は大体に於てヘルベチアヒユツテの構造を大きく、そして精巧にしたものゝ如く、正面玄関を入れれば左手にあたつて階段あり、階段を上りて真直につきあたれば便所、其手前に於て右にドアを押せばスキーの置場、即ち玄関の間とも云ふべき部屋あり。更にドアを押して奥に入れば、中央に大ストーブを圍んで奥兩隅にダブルベット、手前の兩隅にシングルベットあり。奥兩隅のダブルベットの間並に左右ダブルベットとシングルベットの間、つまり三ヶ所に食卓が据付になつて居る。そこでこんどはこの部屋から丁度今入つたドアと同側で對稱の位置に設けられたもう一つのドアを開くと調理場に出る。そしてこの調理場は玄関の右側に設けられた物置に通じて居るのであつて、物置からは又別に玄関に通ずる入口あり。つぎに階上は階下廣間のスキー置場と、調理場に通ずるドアの丁度中間に設けられた勾配なくして上り降り

出来る様巧に造られた梯子により通じ、左右に手稻バラダイスヒユツテ式のベットが七個つと備ひつけられてある。しかし手稻バラダイスヒユツテと異り左右兩側のベットの間即中央が階下と空氣の流通出来る様廣く抜かれ、つまり階下のストーブの温度を階上にも取り得る様考案されて居る。

以上は勿論極めて概略の説明にすぎぬが、之によつてみると本邦に於ける既成ヒユツテのいづれのものよりも精巧を極めて居る。

さてこの様に建設地の決定、設計圖の完成の上いよく工事に着手したのは偶然にも殿下御成婚の吉日、九月廿八日であつて、立木の檢分、伐木、材木其他の運搬等の手配は其後至極順調にはこばれ、十月十七日正午には北大側より總長代理根本事務官、大野スキー部長、山崎教授、荻原營繕課長、スキー部員、帝室林野局より沖野技師、工事請負人伊藤豊次氏其他關係者一同集り壯嚴な地鎮祭が行はれた。

越えて十一月廿六日には上棟式、十二月十日には目出度落成を見るに至つたのである。設備品としてのベット、毛布、炊事具、其他小道具も十五日迄には備へつけられ、今はすでに秩父宮殿下の御使用遊ばさるゝを待つばかりとなつた。

次に此ヒユツテを中心に登れる山々、そして所謂ケツテントウレンのプランを想定して見よう。

先づ近くの山々を數へるならば、空沼嶽（一二五一米）狭薄山（一二九六米）札幌岳（一二九三米）惠庭嶽（一二三九一米）等々。遠くは中山峠の連峯等を數へることが出来る。

宮様ヒユツテを中心にプランの二、三を想像して見るならば、札幌より一泊コースとして、札幌を早朝に出て、豊平驛から定山溪鐵道を石山で降り、宮様ヒユツテ途中の部落土場の里際まで緩かな殆んど平地に近い道を進んで山へ入ることになる。先づ時間的に數へて行くと、札幌豊平驛を朝七時半頃立つと石山へ二〇分、それより土場の離れへは約二時間、山へかゝつてから二時間半乃至三時間と見て、正午乃至は午後の一時頃までにヒユツテに達することが出来る。そしてそ

の日は一泊して翌日は早朝にヒユツテを立つて空沼岳を登り、更に札幌岳を登つて、瀧ノ澤といふ部落に下りて汽車で札幌へ歸ることが出来やうし、又札幌岳を登つていきなり定山溪にも下ることが出来る。足さへ揃つて居れば空沼岳、狭薄山札幌岳を経て定山溪にも滑走が出来ることになるであらう。

ヒユツテに滞在して近くの山々を登つて來るとすれば、空沼岳、札幌岳、狭薄山、南へ行つて漁岳、恵庭岳方面のその一つを選んで滑りに行つて來ることが出来る。狭薄の下り斜面、漁の大斜面の滑走は必ず深い印象を遺すであらう。

更にケツテンラウフのスタート點としての宮様ヒユツテを考へるならば、奥手稻方面、中山方面をあけることが出来る。

### 三泊四日行程

札幌―宮様ヒユツテ―一泊―空沼岳、札幌岳、狭薄山を登破して定山溪に二泊目―小樽内川に沿ふて登り奥手稻に出で―ヘルベチアヒユツテに第三泊目、翌日朝里岳へ登つて小樽へ歸ることが出来やう。若し此處に寄らずに奥手稻から錢函へ出て終へば其日に札幌へ歸れる。

此行程の後の方でヘルベチア第三泊とすれば翌日は手稻を登つてバラダイスヒユツテに出て、輕川へ下り札幌へ歸ることが出来る。之が又三泊四日の行程となる。

更に中山峠連峯へ行くとすれば三泊四日の行程が考へられる。

札幌―宮様ヒユツテ―一泊―空沼岳、狭薄山、札幌岳を経て―豊平川上流の二岐の御料ヒユツテに第二泊目―中山峠へ出で喜茂別岳（一一七六米）麓にある山岳會ヒユツテ第三泊目―翌日喜茂別岳を登つて黒橋に出で京極線（私鐵）より北海道本線俱知安驛に出で札幌へ歸る。若し山岳會のヒユツテに二泊三泊するならば、中山連峯、喜茂別岳、並河ヌグリ（一三八七米）無意根山（一四六〇・七米）を登破して來ることが出来る。此三泊、四日コースを逆にとることも出来る譯である。若しも山岳會の中山ヒユツテと、余市岳の途中にでも一つのヒユツテが出来れば、そこに泊つて余市岳に出て、小樽スキークラブの朝里岳ヒユツテ、或はヘルベチアヒユツテに出て札幌へ歸つて來ることが出来る譯であるが、さうすれ

ば、全く一巡した最も痛快な、又面白いスキートのトゥレンラウフが出来る譯である。

又中山ヒユツテから並河スブリ、無意根知、長尾山を経て元山鑛山に一泊して翌日定山溪へ出て札幌へ歸るコースも出来るであらう。

宮様ヒユツテを始めとして、多数のヒユツテ連絡を持つことの出来た北海道は、名實共に日本吾東洋のスキートの大中心となることも遠い將來ではないと思ふ。

さるにても幸福なる北海道のスキータ家達と私は申したい。

秩父宮殿下が、如何に我が北海道のスキータ地の爲に有難き思召しを垂れさせ給ふて居らせらるか御推察申し上げるだに恐れ多いことである。

僕等は已に昨冬殿下の御來道を仰いで、吾が北海道のスキータ史上に一大光榮の頁を飾り、更に又此度は殿下御自身のスキータヒユツテを頂いて一層吾等が北海道のスキータ界の歴史は光彩を放つて來たのである。一に殿下の御高德の光と申すべく、吾等は殿下の無窮の御高德と有難き御思召しに添ひ奉る様心して行かうではないか。

— 二八・二二・一八一 —

# 登山家の横顔

伊藤秀五郎

## 枯淡の十一月

十一月の手稻山は、枯淡な淡彩南畫的な風貌を具へてゐる。それはおのづから、やや年老ひた古雅な登山家を聯想せしめる姿である。その地肌は平原と同じく、霜雪に發香を失つた枯草色である。そしてつい數週間前迄は、錦の華麗をもつて人の眼を索いてゐたあの厚生のなあらゆる粉飾を脱いで了つて、寒風に洗はれた大氣の中に、がつしりと地殻の骨組を露してゐる様態は、多彩的な性格や趣味を漸く純一無垢な境涯に深めていつて、何者にも煩されない生活を牢固たる意志の上に据ゑてゐるといふ様な、やや額の廣くなつた登山家の風貌に一脈の相似をもつてゐるのである。この季節の轉向の初めに於て、重壓的な冬への沈潜と、更に春への明るい希望と、——そこにもまた自ら、無限の温情を隠した登山家の高雅な風格が偲ばれるではないか。十一月の薄光に淡彩された手稻山を眺める時に、私はいつもこのやうな感じをもつのである。

## 登山家の横顔

かなり長い登山の歴史をもつ歐洲に於ては、山岳に關する著書も極めて多い。その中でも優れた登山家らの著書から私

達の直接うける影響の大きいことはいふまでもないのであるが、それらの登山家らが彼等の著書に於て、それが單に一編の案内記に於てすら（或は案内記であればこそ、尙更そのことは必要なのだ）序文の中に言つてゐる短い言葉——これは二十年の經驗を基礎にして書かれたものであるといふやうな言葉ほど、私達年少のものに對して、穩かな而も熱意ある響を傳へ得るものはないであらう。この用意された二十年といふ一つの言葉の中に、著者のもつ山へのあらゆる愛と憧憬とあらゆる熱と眞實と、更にさらに確實性と、そして重厚なる登山家の態度が秘められてゐる。この一つの言葉こそは、彼の全き意志と感情の象徴なのだ。そこに微笑を湛へた彼の横顔がある。——意志は口に、愛情は眼に、憧れは額に、そして眞實は頬に。私は、この尊敬すべき一つの言葉に就いて自ら學ぼう。そして、山登りの最初の一步を私はそこに始めよう。

### 偉大なる發見

將來に於て世界の文明は南下する、と或る學者は言つてゐる。あるひはそれは正しい見解であるかもしれない。しかし假令將來に於て熱帶文明の世界が來たとしても、私達の意識から北や雪の世界を没却して了ふことは出來ないであらう。牢固として地上幾万尺を抜いてたつアルペンやヒマラヤは、その時にもなほ今日と均しく不易の姿相をもつて私達の眼に映るであらう。そしてその時にもなほ多くの人達は雪の世界に憧憬れるであらう。雪の世界の發見は、實に近代に於ける偉大なる發見の一つである。しかしこの發見はさ程古いことではないのである。我國に於ても僅々二十年前迄は雪の世界は知られなかつた。ニイチエやカーライルが輸入された當時にあつても、寫生の題材としてならば既に一部の人達の間には注意を索いてゐたのであらうが、しかしそれは唯遠くから雪の世界を望見し、想像し、快樂してゐるに過ぎなかつた。實際に雪の世界にはいつて行つたのは餘程近いことである。しかしながら、この偉大なる發見の恩恵に浴してゐる私達にとつて、そのやうな詮索は畢竟無益であらう。何故ならば、私達現在の關心は、如何に多く私達自身この偉大なる發見を

繰り返へすかといふ實際問題に懸つてゐるから。

### Der Berg des Herzens

總ての登山家は理想主義者だ、といふことは決して單なる誇張ではない。私は、このことに就ては他の機會に詳論しようと思つてゐるが、登高といふことが既に理想への過程の一つの現れとも考へられる。彼等は山を登りながら、いつか彼等自身の心に聳える山を登らうとしてゐるのである。(Der Berg des Herzens といふ言葉は恐らくヴァルメール・シュミットクンツに依つて最初に用ひられたものであらう。)そして彼等の精神の根柢を流れてゐるものは常に永遠なるものへの憧憬である。如何にその登り方に於て異らうとも、彼が敢へて登高をなす限りに於て、この一點は常に一致してゐるのである。そして彼の行手に新しい峯が次ぎつぎに現れて來ることは、とりもなほさず彼の登りつくべき頂がそんなにも高いことである。そして、今、彼が登らうとしてゐる新しい山は、單なる有形の有限の山ではなくして、無限に高き無形の山に外ならないのである。

### 谿

### 谷

それは決して大膽的な雄大な規模をもつてはゐないが、色彩に富んだ我國の谿谷の美しさは、恐らく世界に誇るに足る風景の一つであらう。我國の山岳はこれを谿谷と離して考へることは出來ない。それ程に我國に於ける谿谷は、山岳の重要な要素となつてゐる。そして初め山岳の高い頂にのみ心を索かれてゐたものの、遂には思慕の對稱を谿谷に移すやうになるのも、そこにまた永遠の世界があり、深き思索の世界が展げられてゐるからである。

永遠なるものの姿としては、常に玲瓏たる山岳の擧げられるのを例とするが、深く心を潜めて見れば、流れる水にも亦永遠なるものの姿の宿してゐるのを知るであらう。蘆花も亦「自然と人生」の一章に於て、逝者如斯夫、永遠の二字は、



海よりも寧ろ大河の濤にありと思ふ、と言つてゐる。

谿谷への思慕は、單に谿谷のもつ感覺的な形態へのそのみではなくして、またそこには無限に深き世界があり、永遠なる世界の象徴のあるからに外ならない。

## 南方の空

嘗て私は、北には私達を惹附ける何者かがある、と書いた。その頃の私は、霧深き北歐の自然にひとり孤獨な情熱を馳せてゐたのである。しかしながら今にして思へば、自ら孤獨なる情熱と信じてゐたものも、未だ少年の英雄的感傷にかなり濃く陰影づけられてゐたことは事實である。

いつたい幼少の頃の私は、ひたすらに明るい南方の空を憧れてゐたものである。それが北海道に遊ぶやうになつてからは、思想のうへに於けるその風物的影響も原因して、私の興味の對稱は漸次南から北へ移つていつた。嘗て強く私を誘惑した熱帶的の風色、そして如何なる熱帶的のものも最早私の心を索かなかつた。私はそひかに北方の自然に私の夢を繼いでゐた。私は寧ろ偏心的に北を愛し、ことさらに南を斥けてゐたのである。

併しながら現在の私は、當時に比すれば餘程自由な境地にある、北方の自然が私の心を索くことに於ては變りないが、南方の風物も亦捨て難く思ふのである。私はいつか機會があつたならば、南方の濃い碧の空の下に遊んでみたいとも思ふのである。

## Alpinist metamorphosis

「個體發生は、系統發生の進化過程を極めて短時間のうちに繰り返す」といふヘッケルの Biogenetic Law は、今日では已に歴史的學説となつて了つたけれども、しかしこのことは登山思想のうへに於て、個人と時代との關係には言ひ得るこ

とであらうと思ふ。即ち一個の登山家は、登山思想の歴史的發達を、彼のうちなる登山思想の時間的發展に於て經驗するもののやうである。勿論、恰も昆虫に不完全變態がある如く、その當初より現在にまで到つた登山思想の變遷の或る時代を、その個人的推移に於ては缺く場合もあるであらうが、恐らく多くは、その登山の經驗のすすむにつれて、思想的にもまた歴史的發達の跡を辿つて發展するものであらう。誰しも最初の登山に於ては、自然に對する恐威とそれに因る不安の感情とを經驗することであらう。それは即ち古代人の意識であり、未だ登山の發達しなかつた往昔の宗教的巡禮者らのもつた自然觀に外ならない。そして登山の經驗と共に不安の感情は征服心となり、遂には靜觀的な傾向にまで進みゆくものである。これらのことに就ては、敢へて私がここに述べるまでもないことなのである。

さて、ここに私は山登りのうへに於ける私自身の小さな經驗を少しばかり願てみようと思ふ。それは時間的にも、まことに取るに足りない程のものではあるが。

山登りを始めてから數年間は、私は實に熱心であつた。(私はここに、私自らを語るのにこのやうな言葉を用ひてもいいのであらうか。それは餘りにも誇張的に聞える恐はないであらうか。けれども私の親しい友人達は恐らく認めてくれるであらう、いま私はたいへん内氣に遠慮勝に筆を進めてゐるといふことを。) 私は私自身の生活の大半を山登りにまで傾倒してゐたのであつた。私は熱情的に、寧ろ狂暴的に自らを山にまで馳つた。——それは友人達をしてしばしば奇異の感ぜを懐かせた程に。しかしながら、その當時私は山に就いては全くの無智であつた。——私は山登りが何であるかを考へたこともなければ、また考へたとしても到底解らう筈がなかつた。唯譯もなく我武者らに登つてゐた。私をして盲目的に直線的に登らしめた程、それ程にも強く山が働きかけたに過ぎなかつた。とはいへ今も私は過去の盲目的な時代にまで、決して自ら輕蔑は感じてゐない。何となれば、誰しもそのやうな時代は一度は經驗するものであり、(若し經驗しないで済ませれば尙更幸なことである) 年少の頃の熱意こそ、全く純粹なものであるからである。私は今日に於ても尙、微笑をもつてその時代をば回想することが出来る。

そのやうな時代の幾年か續いた後、漸く私は山に就いて少しづつ考へるやうになつた。山とは、山登りとは、そして何が故に私達は登らずにはゐられないのか、更に、如何なる態度をもつて私達は登るべきか、といふやうなことに就いて考へるやうになり、また山登りに關する著書を讀んでも多少批評的な眼を向けるやうになつた。しかしながら、當時のそれらに對する解釋の總てが正當であつたとは勿論言へない。寧ろ私は甚だ淺薄な解釋を敢へて下してゐるに過ぎない。年少者の僅か數年の經驗は、決して登山の本体を明かにすることは出来ないからである。當時大膽にも發表した私の所論は、いまや背汗の思ひあるものゝみである。

これを登山態度のうへからみると、それは前時代の延長時代と考へることが出来る。山登りに於て至上主義に出發した私は、當時にあつてその徹底された域に到達したのであつた。私は寧ろ偏心的に登山の純粹論を固執し、登山は全くその人自身に屬するものであり、之を他人に示すことが既に不純なものであり、一片の時間的記録すらも不必要であるとし、私自身に是を實行したのであつた。登山や旅行に際して——殊にそれが何分目的を有しない氣儘な彷彿的な旅に於ては、風景を寫真に撮すことすら、心的印象の時間的流動を妨害するものであるとして是を排けた程である。従つてその頃私は決して登山記などは書かなかつた。(この態度は、當時の私の否定的人生觀にも原因してゐる。いふまでもなく、あらゆる登山思想はその人生觀に出發する、そして登山思想も亦一つの人生觀に外ならない。)更に登山の傾向に就いて考へると、私は全く征服欲に支配されたピークハンターであつた。そして雪や氷や岩ばかりが、當時の私の意識世界を支配してゐた。私はいつも遙か高い世界を憧れ、目の前の山の美しさに氣が付かなかつた。それ故、爆發的な私の不満は、僅か三千米の山すら北海道には存在しないといふことであつた。北海道の山岳のもつ魅力を、多くの人が賞讃的な美辭をもつて書いたけれども、當時の私は少しも魅力を感じなかつた。私はこの不満の感情を信州の山に滿し、北海道の山は寧ろ惰性に依つて登つてゐたのである。そして當初あれ程にも楽しいものであり、あれ程にも愉快なものであつた山登りは、今や私にとつて苦痛なるものに變つて來たのである。何者にか索かれて山へ行きながら、登高からは苦痛をその代償として私

は受けとり、或る時は苦痛の餘り、中途からその登山を断念しようとしたことがあつた。口に登山の爽快を誇稱しながら、心は苦痛に満されてゐた。而も遂に私は全く山を捨て、了ふことは出来なかつた。そして次第に私は山に對して懷疑となり、一つの行詰りを感じ、焦燥と不安の影が漸く擴げられて來たのであつた。若しもその暗黒的蛹時代が餘りにも長く續き、そして來るべき覺醒的な時機が私にまで訪れなかつたならば、私は永久に山登りの世界から遠ざかつて了つたかもしれない。しかし或る時に於て、——私はその時のことを忘れることは出来ない。それは丁度、私の人生觀が否定から肯定へ、夜の暗さから、清晨の明るさへと移つた時機と一致してゐる——私は心的覺醒を経験した。全くそれは「拂曉的」に——この言葉ほどその時の心的過程に適切な言葉を私は知らない——私を更生の世界に導いてくれた時であつた。私の山登りのうへに於ける、嘗て想像さへもされなかつた一つの明るい新しい希望が、例へば曲折した長い路を登りつめて、漸く一つの小さな而も展望的な峠の頂に立つた時に、未だ知られざりし新しい浩い世界が瞬間的に眼の前に展けられて來るやうに、湧然と誕生して來たのであつた。嘗てあれ程にも暗い影を湛へてゐた不安と焦燥は、いまや跡方もなく消え去つて、まつたく穩かな靜閑な境地が私の心を訪れて來たのであつた。そしてその時に於てはじめて私は、嘗つて二三の登山家の書いてゐる「拂曉的」な新生といはうか自覺とでもいはうか、とにかくさういふ心の状態を、はつきりと理解し得たやうに思つたのであつた。私は總ての人に頼りたいと思つた程、それ程にもその時の私の喜びは大きかつた。私は手當り次第に山の著書を読み返してみた。そして嘗つて何分私の興味を索かずして、不用意に讀過して了つたものもその時に於ては全く新しい氣魄を以つて私の心にまで迫つてくるのであつた。そして私はそこにこそ著書の眞實の面影を見たのであつた。それからまた私は、嘗つて登山記なども不純なものとして自ら斥けたことは餘りにも偏狹に過ぎたことを覺りまつたく明るい氣分をもつて、私は逆奔的に自ら登山記や旅行記などを書き綴つたのであつた。そしてまた自らひらけて來た心の視野は、低い平凡な一つの山からも、言ひしれぬ深い味ひを映し出し、北海道の山に就ても、その穩かな而も特色ある姿相にまで、新しい魅力を感じるやうになつた。かくて山登りは、決して苦痛なものではなく、靜かにも潤

ひのある實に氣樂な心の對稱となつて來たのであつた。そして私の生涯の山登りの最初の一步を私はそこに始めようとしたのである。そしてそれが假令如何に遠くあらうとも、最早私は、不安と失望を感じることはないであらう。そしてまた何らかの事情に因つて、まつたく山登りが出来なくなつて了ふやうな事があつたとしても、いまや私は決していさゝかの焦燥をも感ずることはないであらう。その時に於てもなほ私は、多くの山の著書を読み、考へ、そして友人等と語り、多くの人達がそれ〴〵に愉快な登山の報を私にまでもたらしてくれ、夕暮のやうに平和な心をもつて期待しようと思ふのである。

## 自然の道

私は近頃、私の山に對する考、言葉を換へれば山登りの精神的な形而上學的な方面のそれをしば〴〵發表して來たけれども、私はそれについてはいつも一つの懸念をもつてゐるのである。いつたい山登りの初期に於て多く考へるといふことは必要がないばかりでなく、寧ろ多分に危険をもつことなのである。何となれば登高精神とか登山思想といふものは、實際的な登山の實行に伴つて、漸次發達し發展するものであるからである。最初は何の理屈なしに、ぐんぐん登るだけでいいのである。そして數多くの山を登つてゐるうちに、自ら山に對する精神的な自覺おぼえは拓けて來るものなのである。そしてそれが最も自然な正當な過程といへるのである。このことに就いては、他の機會にも私は力説しておいたのであるが、特に私は私の極く近くの人達にまではつきりといつておきたいと思ふのである。

## 感傷的登山家

いつたいからいへば、山登りといふものは、その本質がどうの、正當な態度がかうのと、やかましく言ふ必要はないのである。而も私があらゆる機會に自らの貧しい考察を述べ、そしてまた否定的人生觀に出發した登山思想を、餘りにもし

ばく注意してゐることは、まったく後進の人達に對する小さな親切からに過ぎない。鋭敏な感受性に富んだ年少者に對する否定的色彩の濃い登山思想の影響を考へる時、私は私自らの經驗からしても、悚然たらざるを得ないからである。そしてさういふことを憚らず言つたり書いたりする人達の多くが、かへつて甚だ淺薄な皮相的な自然觀をもつてゐるからである。何故といつて、若しも彼が否定的態度に於て徹底したとするならば、彼は敢へて自らの觀想などを發表して、他の同感を求める必要などはないからである。少くともその方が餘程自己に忠實であり、私ならば當然さういふ態度を持するであらうと思ふからである。それとも亦、自己を沈黙に守るには餘りにも人間的であるといふならば、私は最早たゞその文學少女的感傷に對して苦笑する外はないのである。

それからまた、閑寂なる心境への憧憬とか、無邊なる自然にひたる生活とか、自由な氣儘なさまよひ歩きといふようなことも、餘りに不用意に言はれてはならないと思ふ。敢へて意識的に努力しなくても、私達東洋人は先天的に靜觀的自然觀照主義者であつて、老境に入ればいつかは私達もひとりでにさういふ心境に到達するであらうからである。生長力の盛んな若い人達を、殊更にかゝる境地に導くことは、決して適當なことゝはいへないと思ふ。少くとも私達年少者は飽くまでも高い世界への憧憬をもつべきではないであらうか。彼の生涯を雲と風の中に没入してつたかのヘンリー・ヘークも言つてゐるやうに、高山の美的觀念は全く近代的のものであり、その美的世界は高山に登つて初めて意識されるものであり、そして荒涼たる自然の中に自らの情緒を融し、それを再び美として認識することは、たゞ高山を知るものゝみのよくなし得るところなのである。假令何らかの事情に因つて高山に登ることが出来なかつた人と雖も、高山の世界を否定することは出来ないのである。そして私達は先づ最初の目標をその高き世界に置くべきではないであらうか。さまよひ歩きは私にとつてもまったく好ましいことなのであるが、若しそれが低い丘や淋しげな海濱で感傷の涙を拾つてゐるようなものであつては、私は到底同感することは出来ないのである。

また、谷から山を眺めることは私達にとつて實に楽しいことではあるけれども、唯單に咏歎的な美辭をもつてその山の

高潔なる姿を賞讃するのみで、事情は許すにもかゝらず遂に登高を試みようとしないう態度も、私達年少者にとつては、決して好ましいことではないのである。それは假令、かのノーマン・コーリーの言ふやうな、唯想像で山を登り、自ら設けつくつた困難な登高をば恰も眞實の経験の如く語り、而も他人の登山をも自らなしたる如くに言ひ現すところの、所謂「似而登山家」ではないとしても、それが何ら哲學的考察（嘗て谷川徹三氏が雑誌「思想」に發表したやうな）を含まないものであれば、尙更私達はかかる態度にまで注意してもいいのであらう。

論理的には、肯定も、否定の否定として初めて意味をもつものである。同様に、單なる否定のための否定は、何ら論理的な意味をなさない。このやうな理窟は抜きにしても、山登りに於ては、肯定的な積極的な態度こそ望ましいものであり消極的な感傷主義は飽くまでも之を排すべきではあるまいか。

### 廣義の登山家

私は、登山の本質論に於て、登山家は登山するものでなければならぬと言つたが、之は狹義に解した場合である。若し、詩的生活を営むものを、一般に詩人と稱する如く廣義に解した場合には、かのウインスロップ・ヤングが Mountain Club の序文に言つてゐるやうに、單に山を考へるものも亦登山家といひ得るのである。即ち彼は言ふ「この書物は登山家のために書かれたものである。而もその登山家とは、唯單に山を登る人のみを意味するのではなくして、更にひろく歩くことや山に關する著書を讀むことを好み、またそれらに就いて考察を廻らすことを愛するところの總ての人を指すのである」そしてこのことは、またあらゆる著者のいはんとするところであらう。私もまた、登山を一つの小さな型にまで當筈めようとする偏狹な考はないのであるが、唯私自身の山に對する漠然たる觀念を、一つの中心をもつた明確なる判斷にまでもち來たしたに過ぎないのである。

### 夢 想 家

私はこれまでに、情熱とか憧憬とかいふことを、餘りにも多く言ひ過ぎはしなかつたであらうか。けれどもまたそれは餘りにも當然過ぎることではないであらうか。何故といつて、あらゆる登山家は、實に氣儘な夢想家なのだから。そして若し、人間の不幸は決してアダムの林檎に始つたのではなくして、寧ろ彼が夢をもつて生れたことにあるのであれば、登山家は不幸なる夢想家の一群に過ぎないのであらう。

### ワツクスその他

本誌前號で、中村君がワツクスの研究を書いてゐるが、あれは門外漢の私などにもたいへん面白く思はれた。スキー登山にもワツクスは勿論必要なのであるが、あのやうな組織的研究は私達には出来ない。それで、スキー家の研究の結果だけを、登山のうへに利用することが出来れば、まことに有難いことなのである。これからは、ワツクスに限らずその方面の研究が次第に盛んになるであらうし、その結果を發表されることは、スキー登山家をも益すること大であることを疑はない。

— 一九二八・一一・二六 —

### 新設ヒユツテ

- ◇秩父宮殿下ヒユツテ 眞駒内御料林地内万計沼畔
- ◇北海道山岳會ヒユツテ 中山峠喜茂別岳山麓
- ◇小樽スキー俱樂部朝里岳ヒユツテ 朝里岳山腹
- ◇營林區署ヒユツテ 豊平川上流二岐
- ◇京大旅行部笠ヶ峯ヒユツテ



## スキーワツクスの製作に關して

齋藤省三

私達はスキーワツクスのために如何程泣かされたり、歡喜させられたりしたかわからない。特にスキーランナーの腐心の程は計り知れないことである。

我國のスキーワツクスなるものは實に未完成のもので、歐洲のに比して問題にならないことは衆知の事實である。

原料の豊富である我國にて熱心なる製作者が出現すれば舶來のワツクスに比して遜色ないものが出來、尙もつともつと安價に販賣出來るであらうと信ずる。スキーや靴等は舶來品に劣らないやうなものが出來てきたのに、スキーワツクスのみが未完成の儘取り殘されてゐることは實に残念の極みである。

先きに私は化學的見地から、スキーワツクスの原料とな

り得るものを多々列擧したこと（山とスキー第七十六號參照）があつたが、其等の中優秀と思はれるものは左の六位である。

- 一、バラフィン
- 二、黃蠟
- 三、亞麻仁油
- 四、ホタール
- 五、松脂
- 六、護謨

バラフィンはスキーワツクスの滑劑としては最も秀でたもので、昔から今日まで廣く用ひられるてスキー家の脳裡からは決して去らない。

黄蠟はバラフィンと同様よく滑り尙長持ちするやうであるが、高價のため廣く用ひられてゐない。

亞麻仁油は雨傘油紙等に廣く用ひられる防水劑にして、空氣中にて乾燥して弾力性の膜を生ずる乾性油であるがために、バラフィン黄蠟等に混じたり又はスキー材に浸透させたりすれば、防水と同時に滑劑となる。

木タールは低温に於ても其粘着性を中々失はないため、スキーワックスの粘着劑としては先づ秀逸の方であらう。

松脂は温暖の時は粘着性に富んでゐるが、冷寒になると反對に滑劑となる。松脂には我國の杉樹から採取したものと、歐米の松樹から採取したもの（俗に洋チャンといふ）とあるが、後者の方が精製されてゐる。

護謨管ゴム栓等をホタールと共に熱するときは、彈力あり粘着に富むものとなるが、冷寒に遇ふと硬くなり勝ちである。生アラビヤ護謨は松脂と大同小異である。

之等六種のを適當に配合すれば、グライトワックスやシユタイグワックス等種々のものが作られる筈である。

舶來のワックスの原料も上記の六種位のものである。製法は低温度にて先づバラフィン或は黄蠟を溶解して後

亞麻仁油・ホタール・松脂・ゴム等を入れ十分乃至二十分間（多量製産の時はもつと長時間）よく攪拌しながら煮る。

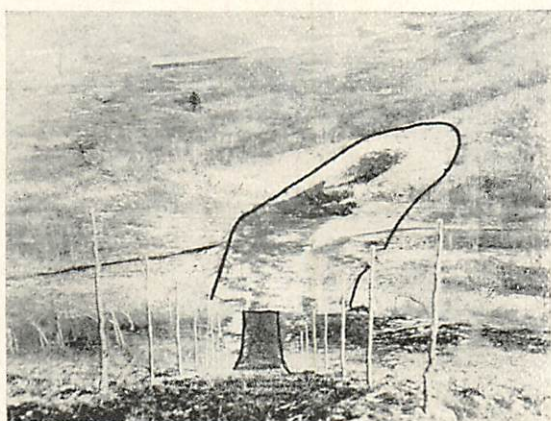
此際グライトワックスならやゝ高温に熱しても差支へないが、シユタイグワックスなら終始低温度にて熱する方が良結果を得られる。而して適當の型に流し込み自然に冷却するので、製法はかく至つて簡單である。

昨シーズン小暇を盗んで上記の材料を用ひ、分量を種々に變化したところ、案の狀硬軟様々のワックスが出来た故に左にその大要を報告する。

	バラフィン	黄蠟	木タール	松脂	亞麻仁油
一	10.0	10.0	—	0.5	1.0
二	10.0	—	—	0.5	1.0
三	—	10.0	—	0.5	1.0
四	10.0	10.0	10.0	0.5	1.0
五	10.0	—	10.0	0.5	1.0
六	—	10.0	10.0	0.5	1.0
七	10.0	—	10.0	0.5	1.0
八	—	10.0	10.0	0.5	1.0
九	5.0	5.0	10.0	0.5	1.0
十	6.0	—	10.0	0.5	1.0
十一	—	6.0	10.0	0.5	1.0

赤城山の第五シャントエ

百五米のスタートから見下したアウトランの全景



逆斜面から見た写真で、ランディング斜面の人物は臺から七〇米の地點である。

臺の高さ二米八〇、傾斜一〇度である。



十二	三、〇	三、〇	一〇、〇	〇、五	一、〇
十三	一	六、〇	一〇、〇	一	一
十四	一	四、〇	一〇、〇	〇、五	一、〇
十五	一	四、〇	一〇、〇	一	一
十六	二、〇	二、〇	一〇、〇	一	一
十七	二、〇	一	一〇、〇	〇、五	一
十八	一	二、〇	一〇、〇	一	一
十九	一	一	一〇、〇	一、〇	一

以上十九種のワツクスを大体分類すると

一——九 グライトワツクス

十——十四 グライトワツクスともなり、シユタイ  
グワツクスともなる。

十五——十九 シユタイグワツクス

となる。然し斯く云ふものの雪質寒温の差により確然たる  
區別の出来ないことは勿論である。

以上は同一原料を用ふるとも分量の多少により、種々な  
ワツクスの作られることを示したに過ぎない。駄文では  
あるが、もしこの一文が我國スキーワツクス製作者に對し  
て一つの警鐘ともなれば幸甚である。

### 群馬縣赤城山の

### ジャムビンゲヒル

赤城の山腹大沼湖畔に居を占めて居らるる猪谷六  
合雄氏の研究、築造にかゝる赤城第五ジャンツエの  
大要を示して居るものが巻中挿入の寫眞である。

上段は百五米のスタートより見下したアウトラ  
ンの全景、中段は逆斜面から見たもの、着陸斜面中  
に立てる人は臺端より七〇米の地點にあるもの。下段  
はジャンツエ、臺の高さ二米八〇、傾斜一〇度である  
猪谷氏は隠れたるジャムプの研究家で、多年獨力  
で赤城の山に居られてジャムビンゲヒルを第一か  
ら第五まで作つて、自ら飛んで自ら臺の土を盛り、  
ヒルの修正を爲して遂に多年の苦心の結晶として此  
處に第五ジャンツエの完成をせられたとのことであ  
る。同氏は已に三〇有餘年の記録を作つて居らる  
由、隠れたるジャンプの熱心家、研究家である同氏  
が他日氏の苦心の跡を公にせらるゝの機會を得たい  
と思ふ。必ずや多くの得る處あるを信ずるものであ  
る。

(TK生)

# 憶ひ出深かりしヒユツテンレーベン (五)

—ホルメンコーレンデー—

廣 田 戸 七 郎

ホルメンコーレンデー。

云ふに云はれぬ懐しみのある名である。

私達スキーを爲すものに、可程に懐しみと親しみとのあるものを知らないと言つて良い位、私達は此名に陶醉さへ感じて居る。

スキーを知り、スキーを語る人にノールウエーを知らない人は先づなからう。そしてノールウエーを知つてホルメンコーレンデーの名を聞かぬ人はないであらう。

## ホルメンコーレンデー

之は殆んど全世界のスキー家達の悉く知る處である。

オリムピアの競技が如何に壯んにならうとも、恐らく權

威ある此ホルメンコーレンの競技は衰へることはないであらう。

私達は是迄、權威ある所謂ホルメンコーレンの競技會はたゞ單にノールウエーの年報と、外國のスキー書とそして故遠藤、木原兩先生の書に於て活字上の知識を持つて居たに過ぎない。今度始めて本當にその秩序、その盛大、壯觀そしてその權威を充分覗ひ知ることが出來た。

今日そのホルメンコーレン競技中の白眉として其名もホルメンコーレンデーと呼ばれて居るジャムブ競技會を見て徒らに感激の血に燃えて筆にし口にすべき言葉を知ることが出來なかつた。

世界に幾多のスキー選手權大會ありと雖も、到底此ホル

メンコーレンデーに追従し得るものは他にないであらう。

我が國にも幾多海外スキー地を巡り來られた先輩があるけれどノールウエーを訪れた人は誠に少いことを遺憾に思はれてならない。歐洲のスキーを見るのにノールウエーへ行かずに歸つて來るのは、地方で大宮か沼津邊迄行つて東京を見て歸らぬ様な感がする。私達は木原さんのノールウエーからの御通信によつて、本當に生きたノールウエーのスキーが覗ひ知ることが出來たが、今度の訪問で全く木原さんの話そのもののノールウエーを見て驚かされもし、敬服もした様な次第である。

山を呼吸し、山に生命を見出して、己が精進を積まんとする人は一度瑞西に行かねば嘘であらうし、スキーを愛し本當のスキーを見て來やうとする人があつたら、少くともノールウエーに行かねば嘘であると思つた。そして同時に中歐のスキー地巡りをして居る位なら一冬でよいから、ノールウエーの冬を味ひ、そしてホルメンコーレンの競技會を見て歸つた方が、どんなに良き見聞と多くの收穫を得られるか知れないと思つた。

ヒユツテの方は私は、三月二日にノールウエースキーク

ラブの會長オステゴールド氏に招待を受けて居たので三月一日に山から降りた切りでオスローの宿に居てヒユツテへ歸らなかつた。他の連中は四日の朝ヒユツテを引きあけて山を降りて來ることになつて居たので、ホルメンコーレンのシャンツェで會ふ約束をして置いた。

ホルメンコーレンデーのジヤムプデーは午後一時から競技開始であるから、四日の朝はそんなに急ぐ必要はないと思つたけれど、物が物だけに、さうゆつくり出かける譯にも行かなかつた。

小島老人と小高御大と三人で宿を出たのが午前九時頃であつた。市内電車でマヨルステンまで行つた。先づ此處で驚かされた。

## 人 櫃

何時もならずすぐホルメンコーレン行きの電車の切符を買つてすぐ郊外電車に乗れるのに、今日はその何時ものブラットフォームの横の空地に急造の柵がいくつもとりつけられ、區切られて、十列近くもの人の列が羊腸として靜かに動きをなして居る。ありつただけの電車が今日は運轉されて

居るのであらうけれど、とても人の運搬が仕切れないと見える遅れて列に入つた私達も一度は電車で行かうと考へたのであつた。列に入つたなりでノロノロ動く人櫃に送られて電車に乗らうとすると、あと一時間か一時間半も待たねばならぬやうである。

列に入つてモヂ／＼し乍ら七、八列も向ふの、丁度今電車に乗りかけた連中を見ると、一番電車に近い方の列が半分電車に乗込んだに過ぎない。電車の中はどの電車もホルメンコーレンの方から空になつて来ては、七、八十人位つゝギツシリ一杯積み込んで行くのであるけれど、なか／＼涉らない。

こんなにスキー大會を見に行つて觀衆がヒシ合ひ、コミ合ひして居る光景は、私は未だ嘗て見たことがない。十重二十重に並んで混み合つて居ても、規律よく並んで居る光景は何時も乍ら外國の良い處だと感心された。

とう／＼根氣が續かなかつた譯ではないが、會場へ行つて山から來る連中と落合ふ都合もあるし、又大會開始前の光景や何やらと見學せねばならぬことなどがあつたので、さう遅れても行けないといふ譯で、大分進んで來た列を離

れて自動車でホルメンコーレンに行くことにした。

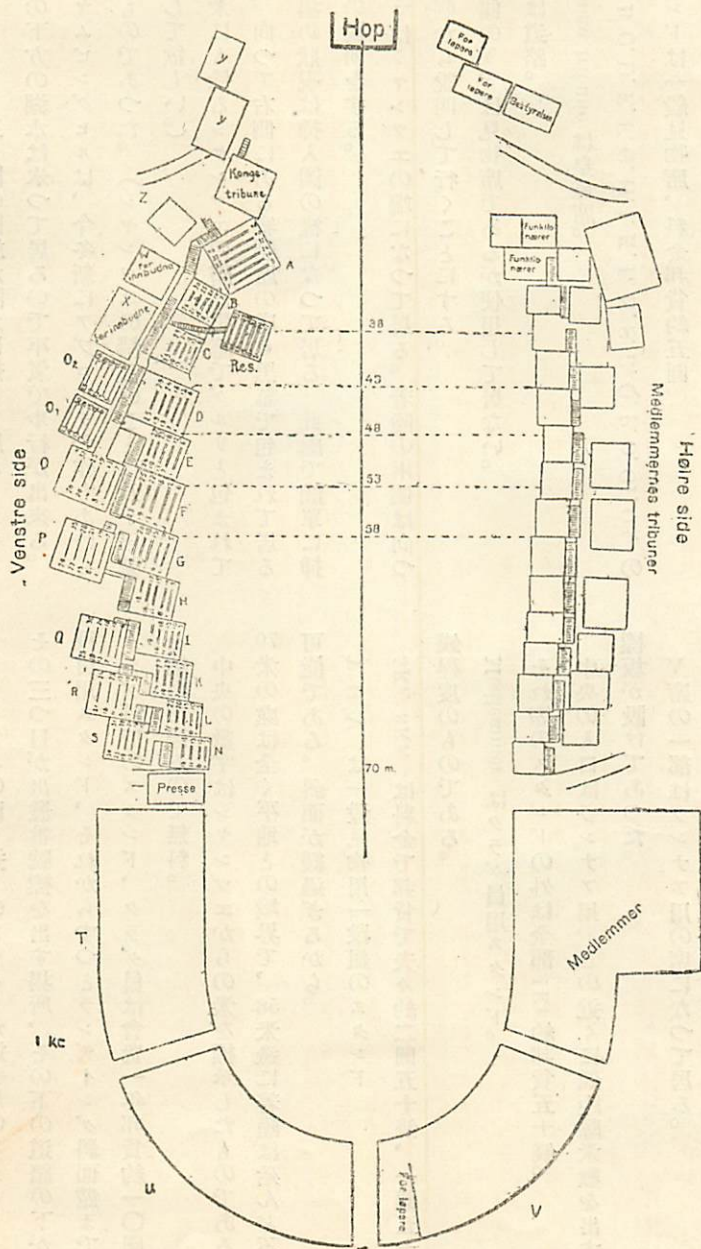
停留所の横で自動車をとらへて交渉するとなか／＼高いことを云ふ。とう／＼纏らずに終つた。止むなく馬櫃を交渉して漸く貧弱な馬櫃にありつくことが出來た。キヲ物を當てこんで自動車賃や馬櫃賃が不斷よりは餘程高くなつて居た。かうしたことは何處の國でも共通な點らしい。世界共通の悪い點といつた様な統計でも作る人があつたら此一事はたしかにあげられねばならない處であらう。

電車に乗れずに溢れた人達は、ホルメンコーレンの街道をテク／＼歩いて居る。私達の馬櫃は早くはないが、それでも歩く人達を何百人も追ひ越して、午前十一時半頃會場の入口に着いた。馬櫃賃八クローネばかり拂つてやると未だ酒代をくれと云ふ。小高御大何吐かすとケンツク喰はせてドン／＼入口に行く。入口には近衛の兵隊さんが立つて居る。豫め貰ひ受けた入場券を差し示して場内へ入つた。

## 會場

數千の觀衆はもうジャムピングヒルの兩側に席を占めて競技に出ない選手達の一躍毎に拍手と歡聲を擧げて居る。

# Tribunearrangementet i Holmenkolbakken





ランディング斜面の附根邊にノールウエーの國旗と日章旗とフィンランド三ヶ國の國旗が靜かに搖いで居る。シャンツエの下方の湖水は氷つて居るので平氣で歩行が出来る。ジャムピングヒルは、今冬新にアプローチが作りあげられたものであつた。(シャンツエの精しいことは八十三號参照して欲しい。)

三米にも餘るシャンツエの膚は黒幕でグルリと包まれて居る。向つて右側にある審判席の膚も黒幕で包まれて居る。會場の状況は挿入圖の様になつて居る。此處で簡單に挿入圖の説明をする。

IIはシャンツエの端になつて居る。着陸の兩側は向つて左側から説明して行くことにする。

左側のY Yは見物席であるが使用して居ない。

Zは道路。

Konge tribune は皇族席。

A. B. C. D. E. F. G. H. I. K. L. N. S. R. Q. P. O. 01. 02. の

スタンドは一般見物席、料金邦貨約五圓。

X. W. は外國スキー團席、無料

Presse は新聞記者席。

向つて右側

シャンツエの直ぐ近くのスタンドが選手用のスタンド、その三つ目が出發番號標を出す場所、その下の道路の下が役員用スタンド、それからずつとランディング斜面麓までクラグ員用のスタンド、クラグ員は會費一年邦貨約一〇圓を納めて居るので無料。

中央の數字はシャンツエからの米を標示したものである。70米の處は全く平地との境界で、58米邊に着陸は殆んど不可能である。斜面が緩過ぎるから。

H. U. V. は一般見物用一段組のスタンド

3Kr. 3Kr. は料金で邦貨で夫々約二圓五十錢、一圓五十錢程度のものである。

Medlemmer はクラグ員用スタンド。

それ等のスタンドの外は全部二圓約邦貨五十錢。

中央の入口はランナア用、この近くに飛距離米を出す標板が設けてあつた。

V席の一部はランナア用の席になつて居る。

尤も標示板は向つて右側の役員席の後上方にもあつた。

奏樂團は右側斜面に沿ふたスタンドの最下方の一つに陣

取つて居た。尙平地の上の一般スタンドは湖上に急設されたものである。

午前十二時半頃には、場を圍んで全く詰詰めの態であつた。

皇太子オラーフ殿下は二、三回飛んで居られたが、今年のシーズンは一向飛んでないとかで轉倒して居られた。でも三十六七米は飛んで居られた。なか／＼骨だけは大人お上手に見えた。

一時近くに皇帝皇后兩陛下は侍従を従へられて臨御になつた。ノールウェー國歌が奏せられ觀衆脱帽の内に設けの席に入らせられた。

### 競技開始

かくて午後一時、複合競技クラスAのノーフィンランの Esko Juvinen のジャムプで競技が開始された。複合競技選手のジャムプの順序は何れのクラスでもデイスタンスの出發順位と同じになつて居た。各クラス別に出場人員を記して行かう。

Klasse A 65名 (申込者 92名) (20才以上)

Klasse B 32名 (申込者 69名) (20才以上)  
Eldste Klasse 16名 (回 32名の内) (32才以上)

Yngste Klasse 34名 (回 69名の内) (18才—19才)

Total 147名

合計が一四七名になつて居る。

之が一分間に五名位づつ飛んで行く。一人二回宛であつた。デイスタンスではオリムピア級は、疲勞して居たのか香しい成績をあげなかつた様だが、ジャムプでは矢張りオリムピア級は光つて見えた。

一回も練習を許されないホルメンコトレンシャンツエでは慥かに本當の實力が見られると思つた。そしてアブローチが大した急でないだけにアブローチのスピードで遠くへ飛んで行かうとすることは、甚だ困難のことでは非共遠くへ飛ぶ爲には、サツツが優れて居なくては飛べない。

今日の各クラスで有名な連中と飛躍距離とを記して見る

#### Klasse A

J. Gröttunstranden	40. 43*	Ole Stenen	42.5 41.5*
Pauvo Nuorio	41. 44.5	Kai Rusten	43. 43
Hans Vinjarengen	45. 47.5	Ole Hegge	38. 39

Olav Kjelbohm	40.5 40.	M.P. Vangli	40.	41.
Sigurd Naestad	39.	Hagbart Hakosen	39.5	37.5
Reider Bjerkeland	39.5 40.	Johan Stoen	38.	37.
Klasse B				
Atre Basterud	43.5 43.	Haral Sørensen	47.	46.
Olav Flaten	43.	Hans Klippen	46.	47.
Leif Refstad	44.	Kr Johansson	46.	47.
Kr Lingson	39.5 41.	Martin Myrmo	40.	41.5
Trygve Brodahl	35.	Ludvig Mathinsen	42.5	41.
Sigmund Rund	47.	Moe Bernsten	40.5	40.
Eldste Klasse				
Ole B. Andersen	44.5 45.5	Karl Haave	42.	45.5
Launty Bergendahl	42.	Bertrand Johansson	42.5	42.
Per Fossveit	40.5 40.5	Otto Aasen	39.5	42.5
Th Hang	40.			
Yngste Klasse				
Leif Baekeroold	46.	Ole Oulle	43.5	47.
Storm Pedersen	45.	Einar Fredboe	44.	41.
Sigm Guttormsen	45.	Alf Stoen	46.5	44.

## 雑 感

今日の競技の盛會さは、到底筆舌のよくする處ではない  
氷つたボンドの氷が見物人の重さに堪え切れなくて割れ出

して中から氷がビチア〜出て来て、大騒ぎを演じたこと  
で大方想像することが出来ると思ふ。今日大會の盛大な一  
つの原因に、日本選手が参加して居たことも慥かにあつた  
と思ふ。日本選手がノールウェー選手と互角に戦つてあは  
よくば優勝するとかせぬとかと云ふことが問題ではないの  
である。たゞ珍客の顔や形や体を見て一共にスキ一の競技  
振りを見様といふのが主であつたことは慥かである。

役員連中の慣れ切つて居ることは、到底オリムピアなど  
問題にならない。オーガニゼイションがよく行つて居るか  
ら、競技をする選手も見物する方も競技に身が入る。

百五十人に近い選手が一人二回宛、都合三百回のジヤム  
プが行はれる譯だが、轉ぶのが僅かで立つのが多い——否  
立つことが當然に思はれて居る——んだから斜面が終り迄  
充分使用出来る。

自分の眼には少し斜面の雪が不良（融けかけて）の様に  
見えたが、實際はさうでなかつた様だ。

會場が又大へん締りが良い様に出来て居ることも競技の  
進行を助けて居ると思ふた。

入口はしかと判らないが四ヶ所か五ヶ所にあつて、その

入口以外からは見物人がスキーを穿いたからと云つて済し込んで来る様なことは出来ない。むしろスキーを穿かない者は入口から入るより入り處がない様に出来て居る。そして周りは小丘で一杯にタンネンボイメが包んで居る。

今日の入場者が四万人と稱されて居た。一人平均入場料を五十銭と見ても二万圓の收入がある譯だ。俱樂部として相當な仕事も出来るし、愈々基礎の固いものにして行くことも出来る譯である。

アルフ・アンデルセンの今日の四八米の記録はホルメン・コーレンバツケンの新レコードであつた。選手初め役員見物人が喜ぶの喜ばないのつて言ひ盡せぬ位歡喜して居た。

然し今日若しアブローチ最上段からスタートして来たなら恐らく五〇米臺のレコードは出たであらうけれど、何故最上段を使用しないのかと聞いたら、スタート點を最上段に持つて行くとレコードが出過ぎて危険であるからと私達の見物席の傍に居たナンゼン君が話をしてくれた。

此ホルメン・コーレンの競技に出場して来る位の選手は何處の國の一流と戦つても相當な戦ひが出来る連中ばかりで

はあるが、さうした優れた連中だけの間にも大きい開きが十五米、少い方で四、五米の開きを見せて居るのだから驚かざるを得ない。

何の選手もスタートが大へん無難作だ。之はあながち優れた連中が無難作にスタートして出て行く爲にこれに連れて外の連中もさうして居る譯では決してない様である。夫に身に自信があるから下手な考へをして居ないのであらうと思はれた。

ジャムブの世界的名人トゥリン・タムスも未だオリムピアの痛手が良くならないと見わた、オリムピアの時の様な元氣を見せて居なかつたが、それでも競技に鮮かに四〇米近くを飛んで居た。然し頑張る力がなかつたと見えて、二度共轉んで終つた。然し彼のフォームは慥かに斯界に新エポックを作つただけにその價值を失つては居なかつた。圓熟して來たと云ふ言葉で形容出来る。

今日のジャムブ競技の結果から見て、矢張り最長を飛んだアルフ・アンデルセンのフォームは立派であつた。殊にサツと空中のフォーアラゲと体の運行は全く神技と言

つて良い。誠にサツツが優れて居なくては遠くへは行けな  
いといつくゞ感じた。

アプローチの滑走法はタムスにしろ、ルードにしろ、ア  
ンデルセンにしろ皆何れも出来るだけ低い姿勢をとつて膝  
を堅くつけることを忘れない。

サツツの時に両手を心持ち後ろへ引いてから離れ際に前  
上方に振り上げて居る連中も居るが、先づさうするのはさ  
うせずにいきなり前方に振り上げると両方半々位と見て  
差支へない。

踏み切りの弱いジャムプを見て居ると、臺から離れると  
直ぐに体がシャンツエの水平面から沈んで行つて終ふ。踏  
み切りの強いになるとシャンツエを離れてから暫らく出  
た方向に否それより心持浮上つて居てすぐに体が沈んで行  
かず、フライトのカーヴを見るとカーヴにユツクリした膨  
みを見る様な氣持がする。

空中での腕の振り方は、上手な連中は矢張り大きく悠々  
とした廻轉をし乍ら、グングン体を前方にかけて行く。勿  
論空中でのフォアアラゲは、サツツの時の瞬間的動作に  
も關係をつけて居るやうであるけれど、空中で又意識的に

前方に体を傾けて行くやうにも見えたし、更に兩腕の運動  
がそのフォアアラゲの動作の補助となつて居ることも體  
かに見られた。

着陸の一瞬間前に腕が一度止つて着陸と同時に軽く兩腕  
が前方乃至は一方の腕が下前方に出さるゝのも多く見た。

着陸の時には殆んど大部分兩スキーを着陸斜面に平行に  
持つて行つて着陸して居る。テールから着陸する様なのは  
極く少數の人達だけであつた。

着陸の時のショックは兩脚で平均に受けるか、大部分前  
脚で受ける様である。姿勢は概して深くもない様である。

立上りは割合に自然に動作をとつて居る様であつた。

今度のホルメンコーレンの競技に出場した外國スキー選  
手はフィンランドと日本だけであつたから競技の最中に聞  
いた外國々歌は、フィンランドの國歌だけであつたが、そ  
れとノールウェー國歌と、日本の君ヶ代を聞いた。日本の  
君ヶ代の吹奏でノールウェー人が感心したエピソードがあ  
つた。

といふのは、丁度麻生君が第一回目を飛んで立つて着陸  
斜面を滑走して行く最中に、真向ふから受ける風の爲に(然

し大した風と云ふ程の風ではなかつたが、被つて居た帽子が脱けかけたので、帽子の飛ばない様に頭に手をやつて帽子をつかんだ處で頭がヒョイと下がつて、丁度其時君ケ代が吹奏され出したのであつた。觀察の鋭いノールウエー人が日本人は誠に感心である。演技の最中國歌を聞いて帽子を脱いで滑つて行く。なか／＼感心な國民だと云つて居たのである。

これは勿論偶然の出來事であつたけれど、さうしたことなまでに感心してくれたノールウエー人が如何に私達に善き印象を持ち、私達を何處までも遠來の客として好遇してくれたか想像して頂きたいと思ふ。従つて私達皆が異口同音にノールウエーの好印象をお傳へすることに決して曠傷はないのである。

好印象のノールウエー。之は私達一同の抱いたそして皆さんに傳へる眞の叫びである。

#### 附記

お断り致します。此ホルメンコレンダーの前に複合競技の十八軒デイスダンスレースの記事を抜かしましたから、それは次號に廻しました。悪しからず。

### 北 大第十七シーズン計畫

新入部員歓迎會

スキー取次

製品引渡

冬季合宿(於青山温泉)申込

冬季合宿

手稻山初登山

インターミドル大會開催の豫定

インターカレッジ大會出場

全道選手權大會出場

全日本スキー選手權大會出場

手稻山下降競走

當部大會

卒業生送別會

春期合宿

選手合宿

尚登山班はシーズン中休日毎に時々之を舉行す。

尚秩父宮ヒュッテ竣工式舉行の際は部員多數發行のこと。

十一月八日

十二月九日、十日

十二月三日、四日

同

十二月二十日より一週間

一月二日

一月十二、十三、十四日

一月十九、廿日

二月二、三日

二月十日

二月十七日

二月十七日

三月下旬

冬季合宿に引續き

# 登山とスポーツ

伊藤秀五郎

私はこゝで、登山とスポーツの根本的差異を、心理學的に考へてみようと思ふ。元來この一文は、前號所載の「登山の本質に關する一考察」の補遺的のものであつて、當然かの小論に含まるべきものであるが故に、此彼參照して頂ければ幸である。

心理學者の研究に依れば、人間には行爲の人、感情の人、思想の人 (Men of action, men of feeling, men of thought) の三原始型が存在するのは明かである。これらはまた其々、爲す・感じる・知る、或は手・心・頭、又は Practice, emotional activity, and intellectual inquiry 等に相當するものであり、これらの三つの Mood の各々の方向に於ける現れとして、例へば政治・藝術・科學を擧げることが出来るであらう。然

しながら、これらの三つの傾向は各個人に於てそれ／＼個別的に存在するのではなくして、如何なる人と雖も、この三つの心的傾向は具有するのであるが、唯各人に依りそれが強弱或は高低を示すに過ぎないものである。如何に智的な人と雖も、全く情意の世界を缺いてゐる譯ではなく、それが全く理智のみの人と見える場合は、他の二つの傾向に對して智的傾向が餘りにも優性を示してゐる爲か、又は形質に於て他の二傾向が潜在性として完全に劣性を示してゐるに過ぎないのであらう。そして社會人としてはこれらの心的三傾向に於て完全なる調和をもつことが望ましいのであり、その最高次の顯現として、ゲーテの所謂 *Grossmensch* 完人を擧げることが出来る。そしてゲーテ自身は

殆んどそれに近い人格であつたといふことが出来るであらう。以上こゝに無關係なるが如き文字を並べたのは、私のこゝに述べやうとする造意が、論理的にこの觀念に出發するからである。

則ち、スポーツはこれらの中の第一の傾向の現れであり、スポーツマンの行爲の人として第一型に屬するものであり（勿論、これは抽象觀念としてである。それ故に、スポーツマンが情緒的傾向をもたないといふ意味ではないことは明かである）スポーツの世界は行爲の世界であるのであるが、山登りの世界は全然行爲のみの世界でもなく、また全く情的な世界でもなく、その各々を具有するところの二面的な世界であり（勿論、實際登山を行ふ場合に、この二つを分離して考へることは不可能であるが）登山家は、行爲人であると同時に、情的傾向の色彩の甚だ濃いものであるこの事實は決して矛盾を示すものではなく、恰も、藝術に於ける舞踊の音楽と彫刻に對する關係に相似するものである。即ち、舞踊は、成形的要素を缺いて律動的要素を主とする音楽と、律動的要素を缺いて成形的要素を主とする彫刻即ち音楽とは對蹠的位置にある彫刻との兩者を繼ぐ中間

藝術であつて、律動・成形の二要素から成立するものであるからである。かくの如く、人間には、幾つかの異つた先天的傾向が存在するとするならば、スポーツマンといひ、登山家といひ藝術家といふのは、これらの諸傾向の分化に於ける表層的發展とみることが出来る。それ故にスポーツと登山とはその本質に於て異つたものなのである。

然しながら、總て個人は限られたる個別的な型に屬するものではなく、人に依りその各々を具有する程度に差があるに過ぎないといふことは既に述べた如くであるから、人に依つてはこれらの諸傾向を、それ〴〵同程度に具有して更にそれを同程度に發展せしめることは可能である。例へば、科學者にして同時に藝術家たり得るが如きである。故にスポーツマンたるスキー家にして、同時に登山家たる人の存在する所以である。このやうな二面的な傾向をもつた人は、恐らく地理的環境に基くのであらうが、瑞西に於て多いやうである。しかし、數多き英國の登山家のうち、同時にスキーの選手になつてゐる人は、寡聞にして未だ私は耳にしない。しかしながらかゝる多能な人の多く現れることは勿論望ましいことなのであるが。

(二六・二二〇)



編輯後記

本誌には愈々竣工せる光榮の秩父宮様ヒユツテの記事を書かせて頂きました。

北海道殊に札幌地方のスキー地は、次第に充實して参らうとして居ります。山岳トウレンの方面には、宮様ヒユツテを初めとして、御料のヒユツテ、小樽スキークラブの朝里岳ヒユツテ、北海道山岳會の中山ヒユツテ等々、之と昨冬作られた奥手稻のヘルヴェチアヒユツテ、一昨年出来たテイネ・パラダイスヒユツテなどの數々のヒユツテが出来、又近くは秩父宮殿下の有難き思召しと大倉男爵の出資によりまして札幌附近に理想的ジヤムヒングヒル建設の爲、世界のスキー王國ノールウエーから三名の選手が來朝することゝ相成り、已に母國を選手遣は出發したとのこととす。私達が理想のジヤムヒングヒルを持つのも 遠くないことと思ひます。如に山に北海道のスキー界は愈々充實して参ります。かく次第に北海道のスキー界の名實揃つて行くことは、獨り北海道のスキー界の幸運とか誇りとのみ云ふものではなく、さうした完備したスキー地を日本に持つて居ることが、我が日本のスキー界の誇りであり、幸運であると思ひます。

スキーシーズン已に來り、新年を迎ふる間もなく、インタカレンツが始め、此處にオリオンピック選手と留守軍を抱擁する各大學専門學校スキー部の火花の散る様な競技會が見られ、シーズン

の酣ならんとする二月上旬には、全日本スキー選手權大會が開始せらるゝ。此間に國際選手がノールウエーから來る。一段と我が日本スキー界は多事にならうとして居る。

吾等は最も愉快なる豪壯なるスキーの眞味、耳を切る様な思ひのする直滑降の感じに、つまらないことを棄て、一意日本スキー界の前途に精進しやうじやありませんか。

編輯の都合で笠ヶ峯ヒユツテの圖面をのせ得られませんでした。が、來月號には笠ヶ峯、朝里岳、御料林、山岳會等のヒユツテの設計圖等蒐載したい積りて居ります。

何卒御了承下さい。

全日本學生スキー聯盟主催 開催日時 場所

全日本學生スキー競技會 一月十二、十三、十四日三日間札幌

全日本スキー選手權大會地方豫選會 一月十二、十三日 大泊

樺太地方豫選 北海道地方豫選(北海道選手權大會) 一月十九、二十日 札幌

東北地方豫選 一月十九、二十日 大鰯

表日本豫選 一月上旬 沼尻

北陸地方豫選 一月十九、二十日 高田

信越地方豫選 一月中旬 飯山

# ス キ 一 年 鑑

(1927—1928)

今年の年鑑は國際オリムピックスキー大會第一回日本選手派遣記念號として發刊することに致しました。従つて内容はオリムピックス選手の報告及感想等を第一として、次いで可及的豊富にオリムピックス土産の寫眞を挿入することにしました。他に本年度代表委員會に附議せる決定事項、規約、規定の改正等編入して居ります。

大きさは昨年通り菊版假製綴としました。

發行豫定日は十一月下旬であります。

定價は實價で金一圓であります。

申込みは各加盟スキー團體で纏めて聯盟本部に申込んで頂ければ甚だ好都合であります。又個人的に直接聯盟本部に申込んで下されても宜しうございます。

全 日 本 ス キ ー 一 聯 盟

東京市橋區宗十郎一町

岡村源太郎遺稿集

スキーデイスタンスレース

完成  
限定五〇〇部

体裁

菊版 三三〇頁 假製綴

紙質

上質紙 寫眞版六葉

實價

金貳圓

發兌

札幌 山とスキーの會

小樽 梅屋運動具店

御申込は甚だ勝手ですが成るべく小樽稲穂町梅屋運動具店宛にお願い申します。

山とスキーの會



SKI HEIL

スキ一  
ト

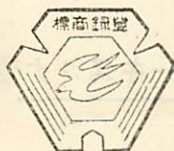
其用與全般

中野商店

スキ一即バツ

第一  
新 最 大  
量 數 産

札幌



GET SUPERFINE SKEES.  
AND MAKE AN  
EXCELLENT  
RECORD!



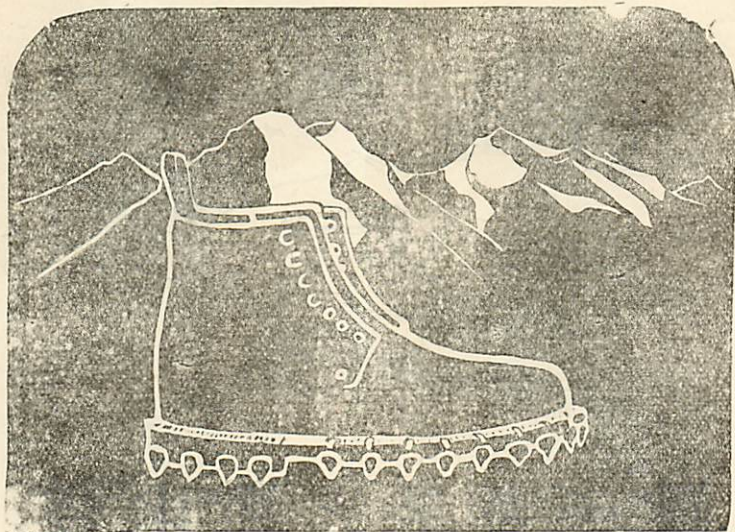
優秀ナルスキトキ其用具

小樽

梅屋運動具店

テ於ニ會覽博藝工産畜回二第

領受牌金賞等一



# 靴一キスと靴山登

.....

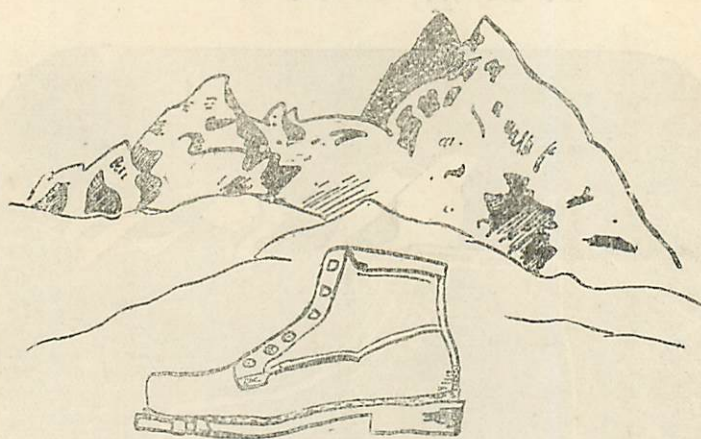
角目丁四區郷本市京東

## 店靴屋田太

番二一七四小話電

番七二一六京東替振

用御部岳山同及部一キス學大國帝道海北



# 靴一キスと靴山登

種 各

街字十條一南市幌札

店 靴 本 木

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことを願ひます、又印書の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、C・G・S系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

\*前金御申込が、現金でなければお渡しいたしません。

\*御送金はなるべく振替にてお願致します。

\*六册分前金拂込の方には送料を頂きません

\*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送ります。次の御送金

あるまで配本を見合せます。

\*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は

頂きます。

昭和三年十二月廿八日印刷

昭和四年一月一日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 小 川 玄 一

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十五丁目

發行所 山とスキーの會

振替小樽八四九五番



La Gazeto  
de la  
Monta kaj Skia Clubo

No. 89. Januaro 1929. Sapporo, Japanujo.

美満津特製ウ井ンタースポーツ

各種用具

飛躍・競走及び

山スキー

競走用ボツブスレー

雪橇・雪靴

アイゼン・ピツケル

其他

美満津の

Toe-apon の曲げ方は  
——確實なる事で有名なり

アイススケート新荷着



合 名 會 社

美 満 津 商 店

東京・本郷・赤門前  
デンワ【小石川】 845, 2071

大正三年七月二十七日第三種郵便物認可  
昭和三年十二月二十八日印刷  
昭和四年一月一日發行

山とスキー

第八十九號

定價金參拾錢